

中央大学朝鮮同窓会

戦前の本学は、日本大学・明治大学と並び、朝鮮出身学生が多く学んでいたことで知られている。ちなみに一九四〇（昭和十五）年から四三年にかけては学部・予科・専門部を合わせて毎年五百人以上の入学者があり、当時約九千人の本学学生の中で朝鮮出身学生は千人を越えていた。

四〇年六月、中央大学朝鮮同窓会が結成され、十九日には臨時総会および柴田甲四郎教授を会長とする就任式が第一八号教室で開催された。同窓会は「中央大学朝鮮学生を以て組織」し、卒業生は特別会員となった。役員には柴田会長以下、副会長に全奎弘講師、名誉顧問に貴族院議員の有賀光豊監事、顧問に森田実予科長以下五人が就任した。

この同窓会は、従来の学生主体の「我等同窓会」を廃して教授を会長とする指導制に改めたもので、「会員相互の親睦を図り兼ねて会員をして学生たるの本分を完

同窓会が明德講座（会員修養のため会長その他が講話）や、校内籠球大会、卒業生送別会、入学生歓迎会、高文合格者祝賀会、在東京朝鮮学生連合籠球大会などを開催したことなどが確認できる。

そもそも「我等同窓会」は、一九一五（大正四）年十一月十二日、神田区神保町の朝鮮料理店で一〇人の有志によって結成された親睦団体で、「中央大学朝鮮留學生同窓会」「ウリ同窓会」などと呼ばれていた。三三年六月には『会誌』が創刊され、その内容から同窓会には庶務部・学芸部・財務部・運動部が組織され、自主的な運営がなされていたことがうかがわれる。

ところで、各大学にも同様な会が組織されていたが、これらは文部省や警察当局からは朝鮮独立運動などの民族運動や共産主義運動を行う組織として監視・取り締まりの対象とされていた。『特高月報』



『中央大学朝鮮同窓会々誌』第1号

せしむる」ことを目的とし、「仁義を理想とし唯物功利を排す」「中正の大道に則り悪平等を滅す」「小我を超えて大我に帰一す」を指導精神とした。会務処理のために幹事会を置き、幹事長のもとに庶務・学芸・修養・財務・ニュース・運動の各部署が置かれ、会員は年一円の会費を負担し経費に充てた。

翌四一年一月には『中央大学朝鮮同窓会々誌』第一号が発行された（表紙は前年十二月十五日）が、柴田会長は巻頭言で、朝鮮同窓会を同郷人間の親睦会であるとともに学生間の修養団体であるとして、「親しきが中に礼儀あり」「学を修め徳を成す」「理想は仁義にあり大道は中正にあり」の三つの標語を会員の道しるべとして示した。

この会誌は四三年五月刊行の第三号まで確認でき、毎号、会長の巻頭言、会の趣意書や会則に始まり、会長以下役員の寄稿、会員の論文・随筆、活動報告などで構成され、巻末には会員名簿が付されている。その記事から

には我等同窓会の『会誌』創刊号について、正規発行の手続きが行われなかったことを理由に内務省で審査した結果、記事の内容が不穏であるとして発禁処分を受け、編集者も検挙、取り調べを受けたとの記事が見られる。しかし、警察の監視が続けられる中で同会の活動はその後も継続され、会誌も年一回千部が発行されていたようである。

戦時体制が強化される中このような事情もあって、大当学当局は朝鮮出身学生のみでの自主的団体のままでは指導監督ができないとして、朝鮮同窓会への改組を行うことになったのである。

しかし、『特高月報』四〇年十一月分の「中央大学朝鮮人学生同窓会の改組状況」によると、学生側もこの措置に素直に従ったわけではなかった。同年六月の臨時総会は、教授を会長に推挙する理由が不明瞭との強硬な反対意見も出されて結局流会になり、十月一日再度開催された臨時総会でも委員の選出方法について一般会員の意志を無視したものと反対がなされている。結局会員の不満を考慮して、同十日定期総会を開催し、幹事の改選を行うに至ったのである。